
降誕～復活～

若木勇童

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

降誕〜復活〜

【Nコード】

N00008P

【作者名】

若木勇童

【あらすじ】

殺された。主人公・大輝がやってきたのは地獄だった。しかし、大輝はひょんなことでよみがえってしまう。しかし、よみがえったのは大輝だけではなかった。

大揮

芦屋大揮の腹にナイフは刺さった。まさか、こうなるとは思いもしなかったであろう。彼は田村祐輔をいじめすぎた。

ここは何処だ？大揮は辺りを見回す。ここは地獄か？

さらさらとした土の上に枯れた木が、辺り一面に生えていた。木以外何もない。遠くの方に獣がいそうな洞窟があるくらいだ。すると、暗黒の雲が立ちこめる空から雲を切り裂くように巨大な人物が現れた。

閻魔大王か？大揮は恐るべし尋ねた。

すると、巨人はそう答えた。お前は無の地獄を味わえそう言い天に消えていった。

閻魔の言ったとおりは何もなかった。腹が減っても死ねない辛さで大揮はとても苦しんだ。

しかし、奇跡は起きた。閻魔が死んだのだ。その時、閻魔の能力が大揮に分け与えられたのだ。閻魔の死因は地獄での仕事が嫌だという理由で、神に逆らい消されたのだった。

そして、地上界へ閻魔の能力で舞い戻ったのだ。

大揮は田村に会いにいく事に決めたのだった。田村に謝るため、そして、田村に復讐するために！

同時刻。日本。

A「さあ、俺達三人。よみがえったようだ。」

B「その、ようだな。世界制服計画も実行出来ますね」

C「当たり前じゃん。田村ってやつも仲間にするんでしょう？」

A「ああ、やつにはあの能力があるからな。」

閻魔のもう1つの能力についてはまた次回。

能力

天国

会議室 神と神の部下

「面倒なことになったな。閻魔の能力が人間の手に渡ってしまった。そやつらを殺す訳にはいかんしな。だが、何処にでも移動できる能力があれば、何回でも生き返られるからな。能力だけ奪わしてもらおう。異論はないな？」

部下たち「はい！」

「うむ。では。ハアー！」

ピカッと一瞬光った。

「く、駄目か！」

「どうしました？」

「生き返ったものたちが、全員持っていた移動できる能力は封じたが、一人一人個別に能力を持っていた。その能力は閻魔の意思で、封印出来なかった。閻魔の奴、地上界に地獄を創るつもりか？能力を得た奴は絶対に暴れて、世界を手中に入れようとするからな。」

日本

家に帰って来たな。俺は死んで、死体も焼かれたはずだ。

カチャと家のどあを開けた。

「お帰り。今日の夕御飯肉じゃがだから」

驚かないのか、俺は死んだはずだと問うと

「馬鹿言っでないで、早く服着替えなさい。今日、部活で遅かったの？とにかく疲れてるみたいだから」

そう言い母はキッチンへ戻っていった。父はまだ帰っていない。俺は死んでいない事になっているようだ。死んだ日と同じ日のようだ。

大揮は、疲れていたのか、自分の部屋へ戻らないなやすぐに寝てしまった。

三人

地獄から帰還し翌日 大揮中学校へ登校 大揮教室へ入った所

よう大揮。馴れ馴れしく花田の奴が話しかけてきた。花田は同じ野球部の友達だ。俺はおはようと答えたが、上の空であった。田村の事だ。田村は俺を刺した事になっているのか？多分、捕まったというニュースが無いことからなかった事になっているのだろう。

「オーイ？」花田の言葉で、われにかえった。

「聞いてた？」

「ごめん。聞いてなかった。なんの事？」

「だから、転校生が来るらしいよ。」俺はどんな人なんだろうと想像してみた。

地獄

四天王 会議室

「はあ、会議室には俺様以外居ねーじゃねーか！人間界には四人が能力を持って暴れる見てーじゃん。俺ら四天王も暴れてーんだがな。閻魔が死んで地獄四天王も1人減っちゃったな。三人でも人間界ぐらい支配できるがな。」

再び人間界

日本

「入ってこい。」

そういわれ眼鏡を掛けたガリ勉風の背の高い少年がはいつつきた。

「僕の名前は部分大地と言います。ぶぶだいちと読みます。」

「部分は芦屋の後ろに座れ」

「はい！」

そう言い部分は俺の後ろの席へやって来た。俺はよろしくといったら

「貴様が能力者か。弱そうだな。」

なんだこいつは？

??????????

昼休み

屋上

昼食後

腹一杯だ。屋上にあがって昼寝でも寝ようかな。屋上のどあを開けて屋上にでた。すると、部分と顔が整った男と中学生ぐらいの美少女が田村を抱えてつれて行こうとした。俺が何をしているんだと尋ねると男が

「田村にはすごい能力があるからつれていく。」

と、言った。俺が殴りかかろうとすると、部分がAとCは行け俺はここでこいつを止めていくと言いAとCという奴は屋上から逃げて行った。

「さあ、お前の能力を見せてみる。俺と戦え。」そう言い部分は俺と戦うことになった。

次回、戦いの予感！

第一戦〜大輝対部分〜

ぶぶだいち

あいつ田村をさらうために転校してきたのか！

その頃

AとCは

「Bの奴を送り込む事になってしまったのは移動する能力がなくなつたからだ。突然能力がなくなつちまうなんてついてないよな？C？」

「Cって呼ぶのやめて！部分の奴もBって呼ぶのやめてよ！うん。私は茅ヶ崎悠愛だよ！」

「そんな事わかつている。すまん？だがな、部分大地は使い捨てるために引き入れたんだ。だから、親しくしないためにもBと読んでおくのがいいだろ？そんな事も分らないのか？悠愛？」

「って事は私もCって呼ぶって事は裏切る積もり？阿知？ふざけないで！」

「いや、そんなつもりは。」

「それでよし。って言うか何で田村って奴、私が運ばなきゃならないの？男なんだから阿知が運ばなきゃならないでしょ。」

「理由。分かってくれるよな？」

「そうだったなすまん。分かった。私が運ぶよう」

再び学校屋上

「部分。お前能力のはどんな物なんだ？俺はどこにでも移動できる能力があつたが、突然なくなつたみたいだな。」

「ああ、僕もその能力ありました。ですが、もうひとつ能力があるはずですが、まあ、僕の能力は教えられませんが、」

「もうひとつの能力？俺はそんな能力持つてないけどな？」

「まさか、あなたももうひとつの能力にきずいてないようだ。こりゃあ、好都合です。さあ始めましょう。」

と言ひ部分は屋上の柵に左手を触れ爆発させた。なんだこの能力は？そして、柵の破片の鉄の棒で襲いかかつてきた。

「死んでください。あなたはここで消えるべきなんだよ。はあー！」

俺はそれをよけ、でんぐり返しをして、壁際から中央付近へ移動した。それを見て部分は鉄の棒を捨て、素手で襲いかかつてきた。するとそこへ花田が屋上へ上がったきた。屋上がめちゃくちやになつたのを見て、

「なんじゃこりゃ？」そう言った瞬間部分に左手で触られ爆発した。花田がしんだ。

「よくも、花田を。俺の友達を！！！」

「邪魔者を消しただけですよ」

「くそー！」いやまてよ？今こそ冷静なるべきだ。あいつは左手でふれた者（物）を爆発させた。そうか、わかった。奴の能力が。
地獄

四天王会議室
「人間界が面白くなつてきたみてーだ
！俺も暴れてー！」

「お前の能力が分かつたぜ。お前の能力は左手でふれた者を爆発させる能力だろ。」

「当然、分かりますよね。どっちにしろよかったみたいですね！」

そう言い部分は鉄の棒を拾い上げた。素手で戦うのを止めたようだ。部分は棒で殴りがかつちきた。それをよけたが、膝蹴りをくらいぶっ飛んだ。さらにキックをくらい壁に叩きつけられた。そして、棒を捨て、左手を前につきだしゆっくりこっちに歩み寄ってきた。そうしてこういった。

「この左手でとどめをさしてあげましょう」

天国の神の部屋 「まずいことになっているようだ。人間界は大変じゃのう。」

俺はとっさに部分の足を右手でつかんだ。すると、

「これは？動けないですと？そうか、これが貴様の能力か！」

どうもそのようだ。俺は足を右手でつかんだまま美術のために持ってきていたカッターナイフを取り出し部分の左手を切り落とした。地獄からよみがえってから、魔力が出てきたようだ。そのため、カッターナイフにも魔力が伝わり、手を切り落とす事ができたようだ。部分は「グワーー！！よくもやりやがったな！」

「左手がないお前には何の恐怖もかんじないんだよ！お前の負けだ！」

すると、部分は服を脱ぎ腹に巻き付けているダイナマイトを俺に見せつけた。自爆するきか？

「さあ、一緒に死にましょう！」

「！！！！！！」

次回決着！

その頃学校の屋上のドア前

この戦いを見ていた野球部の後輩、
新島剛にいしまつよしは警察に通報した。「学
校が大変なことに！」

激闘

屋上

「さあ、一緒に死にましょう！」

「くそ、逃げなくては。」

そう言い俺は屋上のドアを開け降りようとした。すると、その瞬間「ぼん！」と音がした。ダイナマイトが爆発したかと思いその場に伏せた。が、

「爆発したと思いましたか？ いやこれはね、地獄で拾ったんだですよ。これは、爆発させたように見せかけ、その間に術を唱える寸法だったんだよ……！」

と言った。術を唱えてなったと思われる姿を見て、絶句した。その姿は体中が黒い炎で燃えていたのだ。

「この姿になったらもう地上で生活することが出来なくなるんですよ。でも、俺に触れたらその部分が燃え、黒く焦げるんだ！ 僕は前に覆い被さり一緒に死んでもらいます……！ だいたい、ダイナマイトなんて手に入らないし、作れもしませんね。」

こいつ……俺と一緒に死ぬ気なのか？ 死ぬのが怖くないのか？ だが、俺は死にたくない！ 絶対に死ぬわけにはいかないんだ！

僕は……。死んでもいいんだ。阿知達のためなら。

数年前

がが丸小学校

「部分。お前生きてるとむかつくんだよ！ おらっ！」

「殴らないでよ。僕が何かしたのかよ？」

「いるだけで鬱陶しいんだよ！」

「そんな、」

「先生！田口君がいじめてくる（泣）」

「お前何の話してるんだ？」

「お父さん！田口君がいじめてくるよう。先生に何とか言つてよ！」

「そんな奴はなやつつければまいいんだよ！」

先生はいじめを見過ごし、父達、家族は僕の事なんて、どうでもいいと思い、自分の事を分かってくれなかった。

しかし、あいつ達は違った。転校してくるやいなや、田口をぶっ飛ばして助けてくれた。真剣に話も聞いてくれた。初めての友達にもなってくれた。阿知や茅ヶ崎のためなら命なんていらない！

その頃阿知と茅ヶ崎は

「やつとついたね。アジトに。」

「ああ。」

ここで、この町の事を整理しておこう。舞台は首都圏のはしのほうにある人口60万人の中核都市である。M駅から東側に一キロのところは大輝のかよう中学校があり、そこからさらに南に百五十メートルのところは大輝の家がある。そしてこのアジトは駅から北西に二十キロのところに（（森林））アジトはある。

「田村はいつになったら目覚めるの？」

「そんなに強い麻酔じゃないからもうじき目覚めるはずだ。」

「そう。」

という話を二十畳ほどのコンクリート剥き出しの屋根がない部屋で話を、椅子に座りながら話していた。田村はソファに寝かされていた。

田村は目覚めた。自分はソファ―に寝かされているようだ。男と若い女が何やら話をしているようだ。何で俺はこんなところにいるんだ
と思い 昼休憩の事をおもいだそうとした。

「僕は後一分で死ぬ。が、ただじゃ死なない。」

「一分ぐらい逃げ切つてやるさ。」

そう言った瞬間部分は襲いかかってきた。体で突撃してきた。俺はそれをよけたが、よろついて転倒した。それを見た部分は足をつきだして俺に触れようとしてきた。当然俺はそれをひよいと避け立ち上がった。しかし、部分の攻撃は速かった。立ち上がった瞬間、壁の破片のでかい石を投げてきた。その石は黒い炎で燃えていたので避けねばならず、さらに今度はパンチをくり出してきた。俺はそれをよけたが、壁ぎわに追い詰められた。俺は仕方なくそうした。左手で部分の足をつかんだ。前にも同じ事をやったが、同じ事をやってくるとは思っていなかったようだ。激痛が右手に走った。が俺は右手を離さなかった。死ぬわけにはいかないんだ！数秒後、部分は奇声「グワァー！！」をはっし、灰になり空に散っていった。

俺も右手が右手首から下がなくなっていた。が、俺は部分に勝ったから何一つ不満はない。生きている。俺は助かったんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0008p/>

降誕～復活～

2010年11月24日16時08分発行